

底漁資源の漁場開発調査（漁業資源開発調査）

金城 宏

1. 目的及び内容

東支那海大陸棚斜面におけるアラおよびその他の有用資源漁場開発を目的として、その漁場分布調査を3航海計画していたが、強い高気圧の張り出しや台風7号の接近で避難を繰り返し2航海の出港であった。操業は1航海で延べ4回だけでその操業で有用漁種のムツ、アカムツ、ユメカサゴ、ギンメダイ、ハナフエダイ、チビキ、メダイ等が合計で133尾（43%）、その他、ツノザメ類、アイザメ、フジクジラ等で178尾（57%）であった。

今年度は、アラの漁場である大陸棚斜面からはずれた海域での試験操業であったので、アラの漁獲は確認されなかった。

2 調査方法

調査船図南丸（216.09トン）で、底立延縄（10本付×100立縄）を使用して試験操業を行った。餌はムロアジを輪切りにして使用した。調査海域は200～400mの範囲とした。漁獲は船上で体長体重を全数測定し（サメ類は体長測定し海上投棄）して氷蔵にして持ち帰った。

3 調査経過

第1次調査

期間：平成5年12月2日～12月9日

与那国の西海域に位置するメクラ曾根の南側でのアラ調査のため出港したが、強い高気圧の張り出しで船浮港での避難が長くかかり試験操業を打ち切り帰港した。

第2次航海

期間：平成6年1月28日～2月2日

海流：尖閣列島の赤尾礁附近の漁場に向け出港したが高気圧の張り出しで風波高く久米島南に2日間一時避難する。3日目から風波ややおさまり、慶良間推で2回操業を行った。翌日は久米島西海域で2回操業を行ったが、夜半から気圧の谷通過で風速15～20mとの予報であったので、大浦湾に避難するが天候良ならず帰

港した。

漁況：結果は表1のとおりで2日間で4回操業を行った。有用漁種はムツ14尾、アカムツ9尾、ユメカサゴ100尾、ギンメダイ6尾、ハナフエダイ2尾、チビキ1尾、メダイ1尾、その他、シノザメ類164尾、アイザメ6尾、フジクジラ4尾であった。水深は第1回操業海域が200m～300m、第2回が400～500mでいずれも岸礁帯であった。

図1 第1次航海漁場図

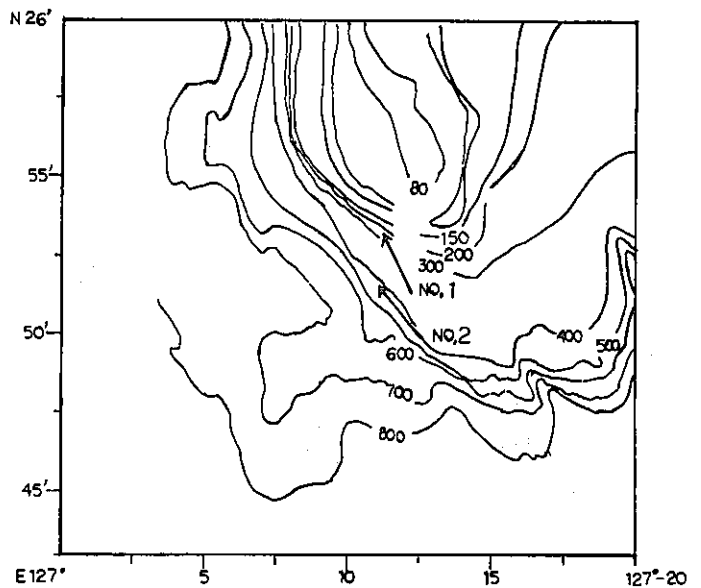
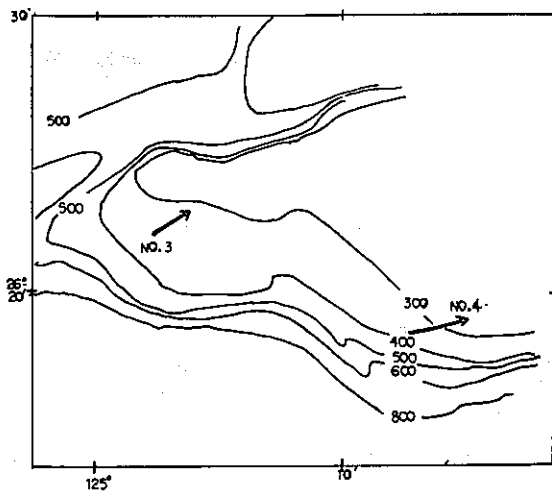


図2 第2次航海漁場図



4 要約

- (1) 調査船図南丸で4回の漁獲調査を底立延縄で実施したが、天候不良で調査は順調でなかった。
- (2) 水深400~500mでの漁獲調査はツノザメ類、ユメカサゴが多獲された。
- (3) 1990年度に当水試が調査したアラの漁場分布調査を基に、糸満漁協活性化事業の一環としての漁場開発事業で、当水試が分布調査した赤尾礁および久米島真西のNo. 6、No. 8の海域で平成5年8月と平成6年2月に2隻の漁船が漁獲調査を実施している。結果は2隻でアラ403kg、アカムシ19kg、オアカムツ65kg、チビキ64kg、ユメカサゴ169kgであった。
- (4) 与那国漁協では、漁場分布図を基に平成5年度からメクラ曾根周辺海域でアラを対象とした漁業経営が普及している。

5. 考察と今後の課題

- (1) 与那国はアラの漁場が近いことから1人り乗りの5トン未満船が、平成5年11月から平成6年3月までの5ヶ月間で7,855kgのアラが水揚げされている。
- (2) アラの市場価値は冬場は高値で取引されるが、この時期は季節風が吹き出し、東支那海では7トン未満船での操業は日数が限られている。
- (3) 本年度でアラの漁場分布調査は終了、次年度からは、マチ類およびその他の有用資源の漁場分布と資源

評価を目的として、水深500mまで生息しているといわれるハマダイ類を対象とした漁獲調査を実施する。

表1 第1次航海操業結果

操業漁場 水漁	業年 月日	No. 位置 (m) 名	1 93.1.30 N25°-51' E127°-12' 436	2 93.1.30 N25°-49' E127°-12' 625	3 93.1.31 N26°-22' E125°-02' 353	4 93.1.31 N26°-18' E125°-12' 366
ム	ツ		1	3	7	3
アカムツ						
ハナフエダイ			2			
ユメカサゴ			1		68	31
チビキ					1	
ギンメダイ			3	3		
メダイ						1
アイザメ				6		
ツノザメ類			52	40	17	55
その他のサメ類				4		